

平成 29 年度第 2 回特定鳥獣保護管理検討委員会及び
屋久島世界遺産地域科学委員会ヤクシカ・ワーキンググループ合同会議
議事概要

開催日時：平成 30 年 2 月 16 日 14:00～17:00

場 所：鹿児島県市町村自治会館 4 階 401 会議室

議事(1)前回合同会議の検討経過概要等について

- ・今回の議題にかなり関係する内容として、個体数推定、捕獲効率について捕獲数は減少してきてはいるが、楽観できないのではないかという議論等があった。

議事(2)ヤクシカの現状について

＜調査方法（糞粒法、糞塊法）と個体数推定について＞

- ・個体数の減少が捕獲によらないのであれば更に少しインテンシブにモニタリングを続ける必要がある。
- ・自然に減少というのであればなぜ減ったかの原因を考える必要がある。
- ・糞粒法では西部も含めて減っているという結果になっている。西部の個体数が減っているのか増えているのか維持しているのか、慎重な判断が必要。
- ・地点の変動幅も大きくなるので、減少していると言っていいのか、今年がたまたま低い値、判断がつかない。トレンドとして下降傾向にあるとはいえない。
- ・激しい年変動を示すのは、降水量によって糞自体が流された場所や年だったりがあったり、それがたまたまなかったのが糞が沢山あったということからくる変動ではないか。
- ・西部の年変動に効いていることは否定できないが、全島の糞粒法による推定値、糞粒密度が下がっていて、糞塊法の結果も山頂部を中心に減っていることは異論ない。
- ・林道の周辺でも近くで伐採の施業をやっているようなところは、伐採した後の餌供給源が出てくるので、糞粒数は減っていない。全体としては確実に減っている実感がある。
- ・場所によって以前と今の糞粒数がだいぶ違ってきている、少なくなってきたような気がする。
- ・大雨で糞粒が流れて下にたまるような傾向は経験上あまりみかけない。雨で糞粒の移動が顕著に見られるとはあまり考えられない。
- ・住民の目視や、遭遇からも推し量れる。里地については確実に減っている。縄張りが無くなって山から下りてくるのかまでは猟友会では把握できない。
- ・小瀬田の長嶺付近は確かに捕獲数も減ってきたし、宮之浦から西の方は、一湊では狩猟する人が少ないから捕獲数は少ない。吉田と永田は以前と変わらないような捕獲数。
- ・糞粒法も糞塊密度調査も、気温の高低、年によって違うので調査の時期が一定で行っているかが重要。
- ・夜のライトセンサスでは、この 1, 2 年の間にかなり夜間出没するシカ減ってきている。
- ・捕獲している民有林は確実に減ってきていると思うが、捕獲場所が偏っている。
- ・高標高のシカの行動があまりわかっていないので今後の課題として取り組んでいただきたい。
- ・捕獲をかけていないところは人為が入っていない、自然変動のモニタリングの場所と考えて、自然変動の場所をモニタリングに使えるのではと思う。
- ・トラップシャイの個体を今後は確実に狙って捕獲するといった発想の転換も今後は必要。
- ・植生の変化としては低地では回復してきている。糞の中の DNA を増やして種組成をみると、ササはあまり出てこずに、ヤクシマハシカグサがかなり頻繁に出てくる。また、コケが出てくるので、高いところのシカは小型植物を食べて食いつないでいる。
- ・シカはササよりもタケノコを好きでタケヤマはなくなっていくというのが屋久島の一つの現状。
- ・カラスザンショウをシカがどの地域でも食べるというわけではない。シカを捕獲するときカラスザンショウというが、生えているのに食べていない場所もある。

＜捕獲効率について＞

- ・わなで捕獲をする目的は低密度化にある。これが達成されて、これがリバウンドしない、低密度で推移しているならばわなの効果があがっていると評価していい。
- ・スレジカの問題があるからといって捕獲方法を考えなおす必要はない。目標は低密度化であり、このためには、くくりわなを中心とした捕獲をすればよい。
- ・くくりわなの種類を変えてもいいし、とにかく全体として低密度化が達成されれば成果である。
- ・給餌とわなの稼働を同時に行うのではなく、継続的な給餌期間の中でわなの稼働期間を限定する方法も期待できるかもしれない。

議事(3)平成 28 年度及び 29 年度の取組について

＜シャープシューティングについて＞

- ・試験捕獲の結果、屋久島の照葉樹林、針広混交林でもシャープシューティングの体制によるシカ捕獲ができる可能性が伺えた。
- ・発砲音を嫌がったり車の音に対する警戒心が上がってくる可能性があるので、配慮していただきたい。
- ・大事なのは捕獲の後もモニタリングを続けること。
- ・今後の課題として、人をどのように配置し、どのように林道を選んでいくか。また林道で行われているくくりわなの捕獲とシャープシューティングをどううまく組み合わせて効率を上げていくかが大事。
- ・どの季節に実施するのが効果的かも考えて実施するとよい。
- ・シャープシューティングの位置づけとして、どういう効果があったか、シカの数のモニタリングや植物の回復状況とリンクさせて組み立ててほしい。

＜捕獲後の個体について＞

- ・せっかく獲るのであれば、妊娠率や腎脂肪、DNA を採取して分析するなど、エビデンスと結びつけることも大切。
- ・「捕殺して埋めていいのか」という批判もある。
- ・利活用できるものについてはするのがベストだが、出口でふさがれて進まなくなってしまう懸念もある。そのため、「何が最優先事項か」を念頭に置き、捕獲個体の扱いを決めるべきである。
- ・利活用を軽視するのではないが、何が優先事項なのかをはっきりとさせて進めていくべき。
- ・「野生動物は自然に腐敗させるのが望ましい」という米国獣医師会の見解もあり、回収して利活用することが必ずしも最も良いということではない。
- ・腐敗食の昆虫もいるので、野外において生態系の中でシカがどのように利用されていくかも含めて今後オープンに議論していきたい。

＜捕獲全体について＞

- ・シカを捕獲するということの目的を強くもつことが重要。
- ・どういう計画でどのように捕獲が行われ、その結果どうだったかを含め、目的や意義を、捕獲に関わらない人たちにも広く伝えていくべきだ。
- ・一般の住民に広く情報が伝えられていないのが大きな問題。情報発信を特に積極的にしていただきたい。
- ・わなやシャープシューティングなど色々な捕獲があるが、世界遺産の中で全体としてどう考えていくかが大事。

＜その他＞

- ・国有林でも許可をいただいて猟友会のわなを設置しているところもあるが、もう一步奥に入ってわなをかけられればなおよい。
- ・今回も花之江河や小花之江河でノイヌが確認されているが、シカの死体を自然に還すというときにそれがノイヌを誘引してノイヌが増えるということもある。
- ・高層湿原の乾燥化が進んでいるのは自然の推移なのか登山者による土砂流出か、シカによる踏圧なのかが気になる。しっかりと水文学的なプロセスを調査して理解しないとイケない。
- ・サルの捕獲数が多いことが心配。シカとサルの対策を同様に扱うことなく、獲り過ぎないように注意すべき。

議事(4)生態系管理の目標について

- ・今後一年かけて皆で案を出し合って作っていききたい。
- ・現段階ではサルに触れていないが、「生態系管理の目標」なので、今後サルについても検討していきたい。
- ・林野の垂直分布のデータを参考に、このくらいまで戻すという目標を、西部、内部などの違いに応じて設定してはどうか。
- ・まずは記録がある 2000 年時点まで種数を回復させるのが現実的。その頃の水準まで戻せないとその先を考えても仕方がない。
- ・それ以外に定性的な目標として嗜好性種で屋久島を特徴づけるヘゴが更新できる状況を組み合わせて設定したらどうか。
- ・ヤクシカについてはオスもメスも集団間の移住率が低い。今後は集落間、標高で移住率を推定して、遺伝的多様性がなくならないよう、地域ごとに、下限目標を設定するのがよいのではないか。